近代における字音接頭辞「非・不・未・無」

小　椋　秀　樹

1　はじめに

国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』（以下、CHJと略す。）の構築、公開が進められ、コーパスを活用した日本語の歴史的研究の基盤が整ってきている。[1] さらに、二〇一九年度からは『昭和・平成書き言葉コーパス』の構築作業も始まった。[2]『昭和・平成書き言葉コーパス』は、上代から近代（明治・大正期）までを対象としたCHJと一九七六年以降を対象とした『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJと略す。[3]）との間を埋めるコーパスである。この『昭和・平成書き言葉コーパス』が完成すれば、現代日本語の形成過程を大規模データに基づいて実証的に明らかにすることができるようになる。

そのための準備的研究として、CHJを資料とした明治・大正期における日本語の実態把握を行うことが本稿の目的である。本稿では、特に近代語において発達した字音接頭辞「非・不・未・無」を取り上げる。「非・不・未・無」は、漢語だけでなく和語とも結合する、否定の意味を添える、「非・不・未・無」が結合して作られた語を形状詞にするなど、共通の働きを持っている。

これら四つの字音接頭辞の近現代における様相については、明治・大正・昭和に刊行された英和辞典五種の訳語を対象とした研究があるものの、雑誌などの実際の書き言葉を対象とした研究は行われていない。そこで本稿では、CHJを資料として、主として計量的な観点から「非・不・未・無」の使用実態を明らかにする。

以下、2節で「非・不・未・無」に関する先行研究のうち、野村（一九七三、一九八一）を紹介し、本稿の目的を述べた後、3節で調査資料、調査対象について述べる。続いて4節で調査結果を報告し、最後に5節で本稿をまとめる。

2　先行研究

本節では、「非・不・未・無」について計量的な観点から調査した研究として野村（一九七三、一九八一）を取り上げる。

野村（一九七三）は現代語における「非・不・未・無」の使用実態から、各接頭辞の特徴を明らかにしようとしたものである。野村

（一九七三）では、国立国語研究所が行った二つの語彙調査（一九五六年発行雑誌九〇種を対象とした調査、一九六六年発行の朝日新聞・毎日新聞・読売新聞を対象とした調査[4]）から、「非・不・未・無」を抽出している。そのデータを基に、各接頭辞が結合する語の長さや意味、品詞性などについて調査し、それぞれの特徴を明らかにしている。特に「非」について、「不・未・無」が二字漢語と結合することが多いのに対し、「非共産主義国」「非現業部門」のように長い語と結合すること、結合形は属性概念を表すものより、実体概念を表すものが多いことを指摘し、「非」が「不・未・無」とは異なる特徴を持つことを明らかにしている。

野村（一九八一）は近現代における「非・不・未・無」の発達過程を明らかにすることを目的としたものである。一八六九（明治二）年から一九六〇（昭和三五）年に刊行された英和辞典五種から「非・不・未・無」を含む訳語を抽出し、出現数、訳語の初出語数から各接頭辞の発達過程を調査している。その結果、「不」は明治期から大正期にかけて新漢語との結合が増加するため、造語力が増大するが、昭和期以降は衰退すること、「非」は昭和期になって造語力を増すことなどを明らかにしている。

以上二つの研究のうち、本稿と特に関連するのは野村（一九八一）である。野村（一九八一）は、近現代における「非・不・未・無」の発達過程を調査した唯一の研究であるが、英和辞典の訳語を対象とした調査であること、調査したのが出現語数と初出語数のみであるという点で問題がある。前者の問題については、英和辞典の訳語としての使用と現実の書き言葉における使用との間にはずれがあることも考えられる。このことから、雑誌等の実際の書き言葉を資料とした実態調査が求められる。

また、後者の問題については、出現語数、初出語数から発達過程を追うだけでなく、語構成、品詞性等についても変化の状況を明らかにし、野村（一九七三）で明らかにされた現代の様相がどのような過程を経て形成されたのかについても調査していく必要がある。

このような問題意識から、本稿ではCHJの『明治・大正編Ⅰ雑誌』を資料として、字音接頭辞「非・不・未・無」の使用実態を計量的な観点から明らかにする。

3　調査資料・調査対象

3・1　調査資料

本稿では、CHJの『明治・大正編Ⅰ雑誌』に収録された雑誌のうち『国民之友』（一八八七・一八八八年）、『太陽』（一八九五・一九〇一・一九〇九・一九一七・一九二五年）を資料とする[5]。調査した短単位データは、バージョン二〇一八・〇九である。各年の延べ語数を表1に示す。

表1：『国民之友』『太陽』の延べ語数（CHJ収録、記号を除く。）

雑誌	年	延べ語数	備考
国民之友	1888	1,006,201	1887年：308,287　1888年：697914
太陽	1895	2,027,505	
	1901	1,977,253	
	1909	1,867,695	
	1917	1,799,799	
	1925	2,030,782	

表1では、『国民之友』の延べ語数を一八八七年と一八八八年とを合計して示した（表1では一八八八年としている。）。以下の分析でも『国民之友』のデータを示すときには、二つの年を併せて一八八八年として扱う。『国民之友』の各年の延べ語数（記号を除く。）は、一八八七年が三〇八二八七語、一八八八年が六九七九一四語で、『太陽』各年の延べ語数に比べて非常に少ない。そこで、『国民之友』の一八八七年と一八八八年とを併せて、『太陽』の延べ語数との差を小さくすることとした。

3・2　調査対象

本稿では、「非・不・未・無」のうち、直後に最小単位二つが一次結合した短単位、又は固有名詞があるものを対象とした。調査対象となるものと調査対象外となるものの例を以下に示す。

（1）調査対象：非公式　非独逸　非基督教　不公平　不釣合　不似合

調査対象外：非實　不揃ひ　不慥か

（1）の調査対象を取得するための検索条件式は、次のとおりである（キーは未指定）。検索には、コーパス検索アプリケーション『中納言』二・四・二を利用した。

（2）前方共起：（語彙素 LIKE "[未不非無]" AND 品詞 LIKE " 接頭辞 %" AND 語種 ="漢"）ON 1 WORDS FROM キー
IN subcorpusName="明治・大正" AND 作品名 ="太陽"
WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

（2）の検索条件で得られたkwicから、「不」又は「無」で表記され、「ブ」と読むもの（例：不器用、無遠慮など）、及び誤解析を除外した。また、kwicに対して独自に長単位の情報を付与し、分析に利用した。[6]

4　調査結果

4・1　語の長さ

以下、本節では「非・不・未・無」を構成要素に持つ語の長さについて、4・2節では結合形の品詞性について調査結果を報告する。4・3節では「非・不・未・無」の出現数と各接頭辞と結合する短単位の初出語数の経年変化についての調査結果を報告する。なお、本稿で調査資料とした『国民之友』『太陽』は、出版年で約四〇年の幅を持つが、本節と4・2節では一つの共時態と見なして（年代幅を無視して）調査を行った。

まず、「非・不・未・無」を構成要素に持つ語の長さについて見ていく。野村（一九七三：三四‐三六）では、「不・未・無」の結合対象の大部分が二字漢語であるのに対し、「非」の結合対象の半数以上が三字以上の漢語であると指摘している。これを踏まえて、本稿では「非・不・未・無」を構成要素に持つ語全体の長さを調査することとした。調査に当たっては、kwicに対して独自に付与した長単位を用いた。長単位が幾つの短単位で構成されているか、接頭辞ごとに調査した。各接頭辞を構成要素に持つ長単位の異なり語数、延べ語数を示

表2：「非・不・未・無」を構成要素に持つ語の語数

	非	不	未	無
異なり語数	306	766	68	455
延べ語数	675	5370	219	1783

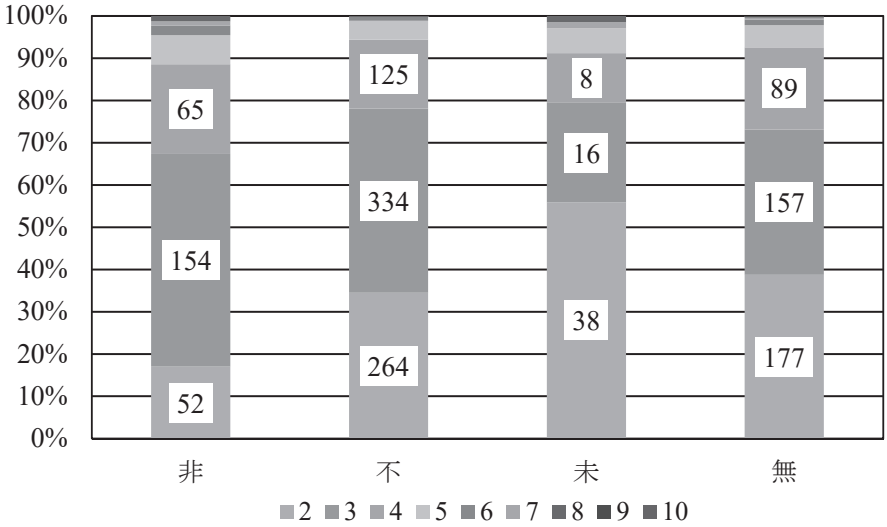

図1：長単位の構成要素数

したのが表2で、接頭辞ごとに長単位を構成する短単位の数を示したのが、図1である。

表2を見ると、異なり語数、延べ語数とも「不」を構成要素に持つ長単位が最も多い。それに次ぐのが異なり、延べとも「無」で、以下、「非」「未」の順となっている。「未」を構成要素に持つ長単位は、異なり語数がこれのみ二桁台であり、延べ語数も三位の「非」の約三分の一と非常に少ない。明治・大正期には、「未」は接頭辞としてまだ十分には確立していなかったと考えられる。

一方、「不」の頻度が他の三つの接頭辞に比べて非常に高いのは、他の接頭辞とは異なり、「不」が中世から接頭辞として用いられていることが関わっていると考えられる。CHJを検索すると、鎌倉時代に一例、室町時代に一三例、江戸時代に一五四例確認できる。[7] 例えば、次のような例である。

（3）此願不満足と舌をのごひ、誓不成正覚と口をはく。

（「海道記」、30-海道 1223_00013, 29220）

（4）人をやとうたと申ても、ふじゆうに御ざらふほどに

（「虎明本狂言集」、40-虎明 1642_03017, 4480）

（5）それに引かへお照はな。不人情なおのれを大切がつて。

（「明烏後の正夢」、53-人情 1823_08007, 44800）

このように近世以前から接頭辞として定着していたことにより、明治期にも高頻度で用いられていたものと考えられる。

次に図1を基に、各接頭辞を構成要素に持つ長単位の構成要素数（短単位数）を見ていく。「不・未・無」を構成要素に持つ短単位は、構

成要素三短単位以下の割合がいずれも七割台となっている。しかしその内訳は異なっている。具体的に見ていくと、「未」を構成要素に持つ長単位では構成要素二短単位の割合が五五・九％と過半数を占めている。「未」は短単位と結合した後、その「「未」＋短単位」（以下、結合形という。）が更に他の語と結合することは少ないといえる。一方、「不・無」を構成要素に持つ長単位では、構成要素二短単位の割合が三割台にとどまっている。「無」を構成要素に持つ長単位は、構成要素四短単位以上の割合が二六・六％で、「不・未・無」の中で最も高い。これら三つの接頭辞の中ではより長い長単位の構成要素になるということがいえる。

しかし長い長単位の構成要素になる傾向が最も強いのは、「非」である。「非」を構成要素に持つ長単位のうち構成要素二短単位の割合は、一七・〇％で四つの接頭辞の中で最も低い。一方、構成要素三単位の割合は五〇・三％で最も高く、また構成要素四単位以上の割合も三二・七％で最も高くなっている。「非」は二字漢語と結合した後、その結合形が更に他の語と結合を繰り返し、より長い長単位を構成する傾向が強いといえる。次に挙げるのは、「非」を構成要素に持つ長単位のうち、構成要素四短単位以上の語例である。なお、（8）の「非領土併合非償金的講和主義」は、構成要素八短単位で、「非」を構成要素に持つ長単位の中で最も長い語である。

（6）そもそも非改正論者は草案を見たることありや否やの一事是なり

（60M 太陽 1901_02007, 132650）

（7）非政友派聯合に源を發し聊か其精神を繼承したとしても

（60M 太陽 1909_05013, 22470）

（8）特派スコベレフ氏の使命に付非領土併合非償金的講和主義に基く建議要項を決定すと。

（60M 太陽 1917_14038, 15940）

接頭辞「非」については、野村（一九七三：三四）に次のように述べられている。

（9）結合の対象となる語の長さが、無・不・未と非とでは、明らかな違いを示すことである。正確に言えば、非を除く三グループでは、大部分が二字漢語（最小単位の一次結合）であるのに対し、非では、二次以上の結合形が半数以上を占めている。

野村（一九八三）は、「非」の結合対象が「無・不・未」と比べて長い語であることを指摘したものであるが、長い語（複次結合語）が結合対象となるということは、結局「非」を構成要素に含む語が長い語となることを意味している。現代における「非」の特徴が、明治・大正期に既に見られるということである。

また、野村（一九八三：三六）は、「非」について一次結合の語（二字漢語）と結合しにくいようであると述べた上で、「非民主的」「非人間性」という語の語構成を「非＋民主的」「非＋人間性」として示している。しかし、この語構成の解釈については、次のようにも述べている。長くなるが、次に引用する。

（10）非は一次結合の語とは結合しにくいようであるが、必ずしもそうとは限らない。次の（ハ）と（ニ）とを比較してみると、

その構造には式で示したようなちがいがみられ、（ハ）の例は、後続する二字漢語と直接に結合しているとみることもできそうである。

（ハ）（〇＋〇〇）＋〇〇：非合法政権・非同盟主義・非武装地帯

（ニ）〇＋（〇〇＋〇〇）：非宗教法人・非共産主義・非汚染地区

しかし、この（ハ）と（ニ）との差は、明確なものではない。どちらのように解釈するかは、個人によって、かなりゆれがあるものと思われる。（ハ）のような分解のしかたが可能なのは、「非合法」・「非同盟」などという言い方が慣用的に単独でも用いられることが条件であり、本来は、（ニ）のような構造を持っていたものが（ハ）のように意識されるにすぎないのかもしれないからである。

今回の調査で得られた「非」を構成要素に含む長単位を見ると、その語構成について複数の解釈ができそうなものが見られる（下線を付した語）。

（11）非海關税輕減論、非改良派、非基督教信者、非穀物同盟、非穀物條例同盟會、非穀物條例同盟黨、非穀物條例黨、非國教徒、非常置委員、非ブルース説（『国民之友』一八八七・一八八八年）

（12）非英國的感情、非歐米崇拜意見、非音字論、非改革論、非改正派、非漢字論、非感情派、非軍人、非國字論（『太陽』一八九五年、一部抜粋）

（11）の「非常置委員」は、野村（一九七三）のいう（ハ）（ニ）のいずれでも解釈できる例である。（11）の「非基督教信者」、（12）の「非英国的感情」は、「非＋（〇〇＋〇＋〇〇）」「（非＋〇〇＋〇）＋〇〇」のいずれでも解釈できる例である。

「非」を構成要素に含む語の長さについて、現代における特徴が明治・大正期に既に見られると述べたが、語構成についても明治・大正期には現代と同様の特徴が見られる。

4・2　結合形の品詞性

「非・不・未・無」の特徴として、結合形全体を形状詞化することが挙げられる。本節では、「非・不・未・無」の結合形のうち、文中に単独で用いられるものを対象としてその品詞性について見ていく。

ここでは、結合形の品詞性を、形状詞、「〜の」による連体修飾、名詞の三つに分類した。このうち形状詞と「〜の」による連体修飾が広い意味での形状詞用法ということができる。結合形の中には、次の（13）のように複数の用法を持つものがある。集計に当たって、これらは重複して数えている。

（13）【形状詞】日本の如き不安心成る所なく（60M 太陽 1901_02007, 127900）

【〜の】不安心の株券を所有せんよりは（60M 太陽 1909_02004, 31930）

【名詞】頭上には不安心附き纏う（60M 国民 1887_08001,

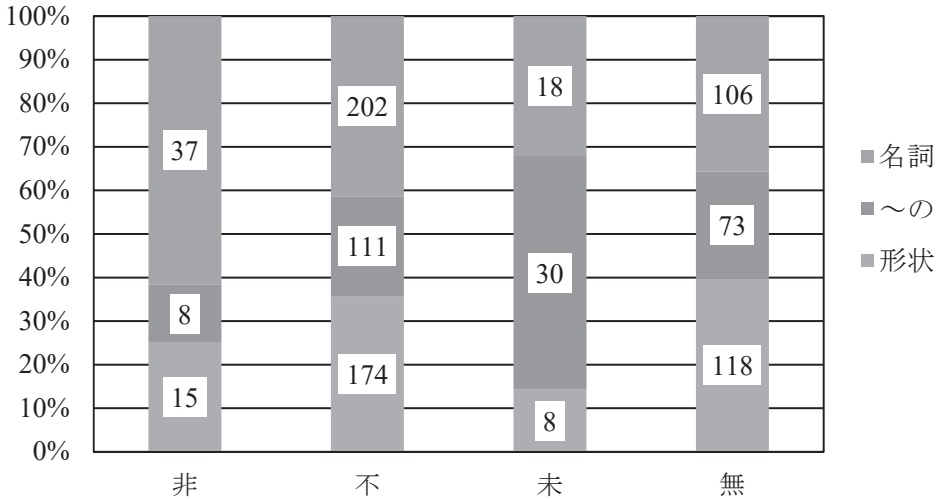

図２：結合形（単独用法）の品詞性

9060)

集計結果をまとめたのが、図２である。

図２を見ると、形状詞用法（形状詞と「～の」による連体修飾とを合わせて、このように呼ぶ。）の割合が最も高いのは、「未」の結合形で、六七・九％である。「無」が六四・三％、「不」が五八・五％でこれに続いている。ただしここで注意したいのは、「未」の用法で最も割合の高いのは「～の」による連体修飾という点である。この用法が五三・六％で、過半数を占めている。つまり「未」の形状詞用法の八割近くが「～の」による連体修飾であり、この用法の多さが「未」の形状詞用法の割合を高くしているのである。実際に形状詞として用いられた割合が最も高いのは「無」で、三九・七％である。それに次ぐのが、「不」の三五・七％となっている。一方、「非」は形状詞用法の割合が三八・三％で最も低い。形状詞の割合は二五・〇％で、「未」に次いで低い。

「非・不・未・無」の特徴として結合形全体を形状詞化するということがいわれるが、本稿の調査では、接頭辞によってかなり異なることが分かる。結合形全体を形状詞化する働きが強いのは「無」「不」である。一方、形状詞化する働きが最も弱いのが「非」であり、「非」の六割以上が名詞として使われている。「未」は、「～の」による連体修飾の用法が中心であり、「無」「不」と「非」の中間的な働きをするものといえる。

野村（一九七三）でも、「非」の結合形は属性概念よりも実態概念を表すものが多いこと、「未」が形状詞になる割合は高いが、連体修

飾で「〜の」を取りやすいことを指摘している。この「非」「未」の特徴は、本稿の調査と一致するものである。これらの接頭辞については、現代における特徴が明治・大正期に既に見られるのである。

4・3　経年変化

本節では、「非・不・未・無」の出現数と各接頭辞と結合する短単位の初出語数の経年変化について見ていく。

字音接頭辞「非・不・未・無」の出現語数を一八八八・一八九五・一九〇一・一九〇九・一九一七・一九二五年の年ごとに集計し、一〇〇万語当たりの調整頻度を示したのが、図3である。

図3を見ると、最も頻度が高い「不」と「非・未・無」の三つの接頭辞との頻度の差がかなり大きいことが分かる。「不」の頻度と、それに次いで多い「無」の頻度とを比べると、両者の開きが最も大きいのは一八八八年で「不」の頻度が「無」の頻度の約四・二倍となっている。最も開きが小さいのは一八九五年で同じく二・九倍となっている。「不」が一八八八年〜一九二五年まで一貫して高頻度で用いられているのは、「不」が中世から接頭辞として用いられており、明治期には既に定着していたことが関わっていると考えられる。

「不」の頻度は増減を繰り返すように動いており、傾向を見出すことはできない。一方、「無」「未」は一九一七年まで、「非」は一九〇九年まで増加傾向を示すが、その後減少傾向に転じる。

次に「非・不・未・無」と結合する短単位の初出語数を見ていく。ここでは、「非・不・未・無」の直後に位置する短単位をひとまず各

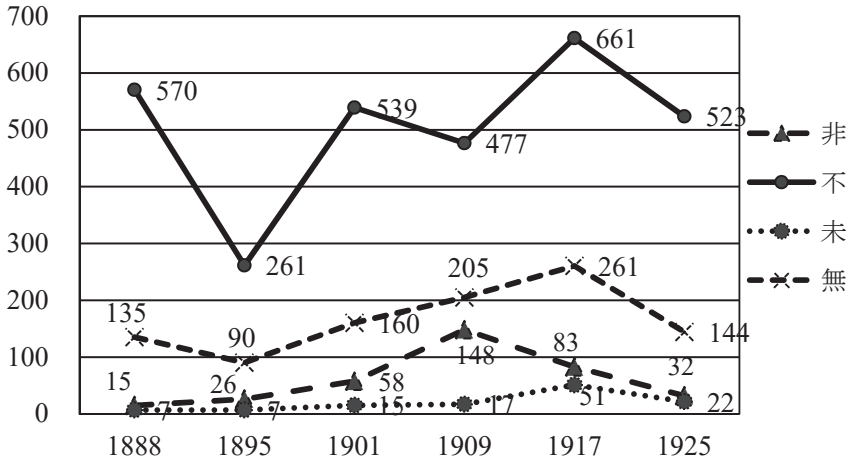

図3：「非・不・未・無」の出現数（延べ）

接頭辞との結合対象と見なすこととした。このようにした場合、「不・未・無」については、直後の短単位を結合対象と見なしてほぼ問題はない。しかし「非」については、直後の短単位を含む複次結合語と結合する場合もあるため、直後の短単位が結合対象とならない場合が、「不・未・無」よりも多くあると考えられる[8]。しかし「非」を含む語に関する語構成の解釈にはゆれもあるため、ひとまず直後の短単位を結合対象と見なすこととした。

調査年ごとに「非・不・未・無」の直後に位置する短単位の一覧を作成し、それ以前の調査年に既出のものを除いて、異なり語数（初出語数）を示したのが、図4である。

図4で特に注意されるのは、「不」が一八八八年から一九〇九年にかけて急激に減少することと、「無」が非常に緩やかに減少することの二点である。図1で見たとおり、「不」は他の接頭辞に比べて極めて高い頻度であり、「無」もそれに次ぐ頻度であった。また「無」は一九一七年まで増加傾向にあった。頻度という面では、非常に高い値であるが、初出語数、つまり造語力という面から見ると、明治・大正期の間に低下していることが分かる。「不」は他の接頭辞に比べて高頻度であるが、これは「不」を構成要素に持つ既存の語が定着し、よく使われたことによるものと考えられる。

これら二つの接頭辞の造語力が低下するのに対して、「非・未」は一九〇九年まで増加する。「非」の初出語数は一九〇九年以降減少するが、「未」はほとんど変化がない。「非・未」ともに明治期に造語力を伸ばしてきており、これらの接頭辞が発達過程にあったということ

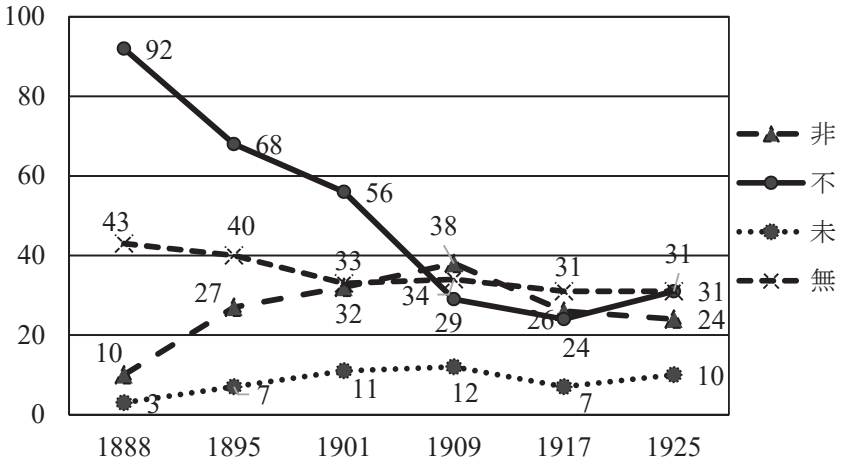

図4：後続短単位の初出語数（異なり）

を、図2からも確認することができる。

以上、『国民之友』『太陽』を資料とした「非・不・未・無」の出現語数、結合する短単位の初出語数の経年変化について調査結果を報告した。次に、本稿の結果と野村（一九八一）とを比較する。野村（一九八一）は、『改正増補和訳英辞書』（一八六九）、『附音挿図英和字彙』第二版（一八八五）、『井上英和辞典』（一九一五）、『研究社新英和大辞典』第一版（一九二七）、同第四版（一九六〇）を資料として、その訳語に「非・不・未・無」を構成要素に持つ語の出現数と、その出現数から先行の辞書に既出のものを除いた初出語数の経年変化を調査したものである。その調査結果を図5、図6に示す。

図5からは、「不」は明治初期から使われているが、他の接頭辞は大正初期から使われるようになること、「不」は他の接頭辞よりも頻度が高いことが分かる。図6からは、「不」を構成要素に持つ語が明治後期から大正期にかけて大量に生産されているが、その後急激に造語力を失うこと、「無」は昭和初期まで造語力を持つこと、「非」は現代になって高い造語力を持つようになったことなどが分かる。なお、野村（一九八一）では、明治初期から「不」の使用が見られることについて、中世、近世において二字漢語と結合した例があり、早くに接頭辞としての用法を持っていたことを指摘している。

この野村（一九八一）の調査結果のうち一八八五～一九二七年が本稿の調査結果と重なる部分である。以下、重なる部分について比較してみると、出現数については、ほぼ同様の調査結果と見てよい。具体的には、「不」が他の接頭辞よりも頻度が高いこと、「非・無」の出現

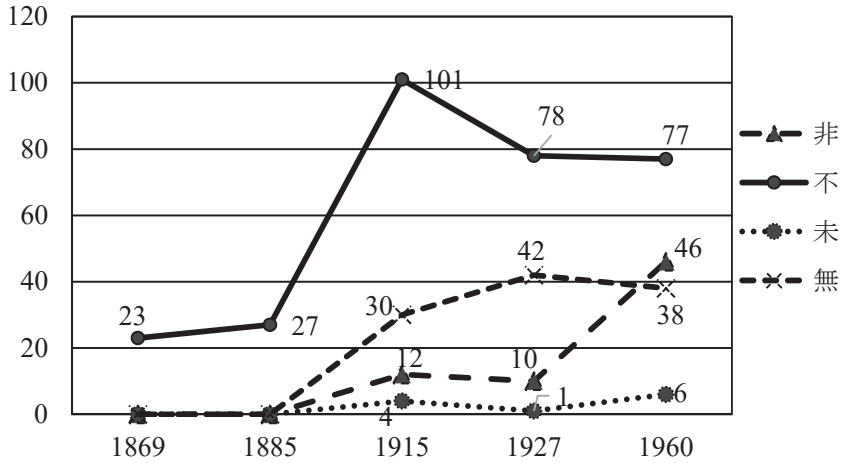

図5：「非・不・未・無」の出現数（野村 1981）

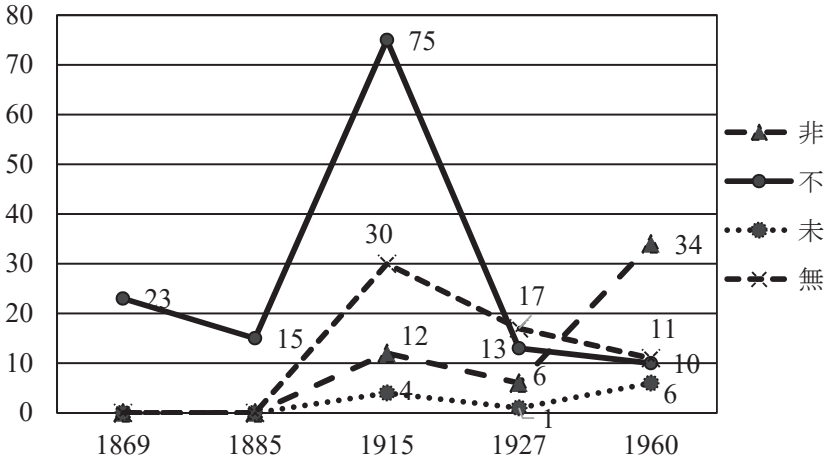

図 6：「非・不・未・無」の出現数（野村 1981）

数が上昇傾向を示すことが共通している。

次に初出語数について見ていくが、本稿と野村（一九八一）とを比較するに当たって注意すべき点がある。それは、本稿では各接頭辞の直後に位置する短単位の初出語数を調査しているが、野村（一九八一）では各接頭辞を構成要素に含む訳語の初出語数を調査しているという点である。つまり初出語数といっても調査の対象が異なっているのである。本稿で、野村（一九八一）と異なる対象を調査したのは、「非併合非賠償主義」（『太陽』一九一七年）、「武装成立案不成立」（『太陽』一九一七年）のような「接頭辞＋二字漢語」（「非併合」「非賠償」「不成立」）が更に他の語と結合し、長い複次結合語を作る場合があり、各接頭辞を含む語全体を対象として初出語数を調査すると、接頭辞の造語力と「接頭辞＋二字漢語」という結合形の造語力とを同一視して集計することになり、適切ではないと考えたためである。このように本稿と野村（一九八一）とでは集計の対象が異なっているが、接頭辞の造語力を見ようとしている点は共通しており、十分注意した上で比較していくこととする。

さて初出語数について、本稿と野村（一九八一）とを比較すると、調査結果に違いが見られる。本稿の調査では、「不・無」の初出語数が一貫して減少しており、特に「不」は急激に減少する。しかし野村（一九八一）では「不・無」の造語力はともに一九一七年がピークとなっており、明治期から大正初期にかけて造語力が高くなっている。

このような違いが生じた要因については、本稿が総合雑誌の『国民之友』『太陽』という一般的な書き言葉を対象としているのに対して、

野村（一九八一）は英和辞書という翻訳の世界を対象としているという点にあると考えられる。つまり本稿が一般の書き言葉における「非・不・未・無」の出現数、造語力を見ようとしているのに対して、野村（一九八一）では明治期以降産出された翻訳語における「非・不・未・無」の出現数、造語力を見ようとしているのである。明治期から大正期にかけて新しく入ってくる英語の訳語を作る際に、「非・不・無」が使われ、接頭辞として確立していったが、本稿の調査結果を見る限りそれら訳語が一般の書き言葉において定着していたとは言い難い。特に「不・無」を構成要素に持つ語については、一般の書き言葉では新しく作られた語よりも、従来からある語が使用される傾向にあったと考えられる。

5　終わりに

本稿では、CHJ『明治・大正編Ⅰ雑誌』収録の『国民之友』『太陽』を資料として、「非・不・未・無」の使用実態について調査を行った。その結果、次のことが明らかとなった。

(14)・「未」は、その結合形が更に他の短単位と結合することが少なく、他の接頭辞より短い語の構成要素となる傾向がある。一方、「非」を構成要素に持つ長単位の約三割が構成要素四短単位以上であり、長い語の構成要素となる傾向が四つの接頭辞の中で最も強い。

・「非・不・未・無」のうち、結合形を形状詞化する働きが強いのは、「不・無」である。一方「非」は、その結合形の六割以上が名詞として使われており、形状詞化する働きが最も弱い。「未」は形状使用の割合が高いものの、「～の」による連体修飾が過半数を占めており、「不・無」と「非」との中間的な働きである。

・出現数を見ると、「不」は、明治・大正期を通して高頻度である。一方、「無」「未」は一九一七年まで、「非」は一九〇九年まで増加していくが、それ以降減少に転ずる。

・各接頭辞の結合対象となる短単位の初出語数を見ると、「不・無」は一貫して減少傾向にある。一方、「非・未」は増加傾向にあり、接頭辞用法の発達過程にあった。

以上の調査結果と野村（一九七三、一九八一）とを比べると、語の長さ、結合形の品詞性については、野村（一九七三）と同様の結果となっている。現代における各接頭辞の特徴は、明治・大正期には既に見られたということである。経年変化については、出現語数は野村（一九八一）と同様の結果であるが、初出語数は異なる結果である。初出語数の結果が異なった要因としては、本稿と野村（一九八一）との調査資料の性格の違いが挙げられる。

今後の課題としては、語構成に関する分析をより厳密に行うことが挙げられる。語構成の解釈（特に「非」を構成要素に持つ長単位）にゆれが生じやすことから、結合形の品詞性、初出語数の経年変化の分析に当たって各接頭辞の直後にある短単位を結合対象と見なして分析を行った。今後は、野村（一九七三）を参照するなどして、語構成について一つの立場を取った上で分析等を行っていきたい。

また、野村（一九七三）の調査項目のうち、結合形の結合用法、属性概念を表す場合の形態などについて、本稿では調査を行うことができなかった。これらについても調査を行うことが必要である。最も大きな課題としては、本稿の経年変化に関する調査が、野村（一九八一）と同様、出現語数、初出語数にとどまったことである。語の長さ、結合形の品詞性、族生概念を表す場合の形態といったことについても経年変化の様相を明らかにし、『昭和・平成書き言葉コーパス』、BCCWJへとつなげていき、「非・不・未・無」の確立過程を明らかにしていくことが必要である。

注

（1）CHJ は、Corpus of Historical Japanese の略である。その設計等については、近藤（２０１５）を参照。

（2）『昭和・平成書き言葉コーパス』は、JSPS 科研費 19H00531「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」の助成を受けて、二〇一九年度より構築が開始された。

（3）BCCWJ は、Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese の略である。その設計等については、山崎・前川（二〇一四）を参照。

（4）一九五六年発行雑誌九〇種を対象とした調査については国立国語研究所（一九六二）を、一九六六年発行の朝日新聞・毎日新聞・読売新聞を対象とした調査については国立国語研究所（一九七〇）を参照。

（5）CHJ『明治・大正編Ⅰ雑誌』の設計等については、間淵・近藤・服部ほか（二〇一九）を参照。また、その形態論情報については、国立国語研究所コーパス開発センター（近藤）（二〇一六）を参照。

（6）CHJ『明治・大正編Ⅰ雑誌』には、形態論情報として長単位の情報を付与することが予定されているが、現時点ではその情報が付与されていない。そこで、BCCWJ の長単位認定規程に基づいて独自に長単位情報を付与した。BCCWJ の長単位については、小椋・小磯・冨士池ほか（二〇一一）を参照。

（7）CHJ 全体から接頭辞「不」を検索した際の検索条件式は以下のとおりである。
キー：（語彙素 ="不" AND 語形 ="フ" AND 品詞 LIKE "接頭辞%"）
WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

（8）引用（9）にあるとおり、「不・未・無」の結合対象の大部分が二字漢語であるため、これら三つの接頭辞については直後の短単位が結合対象となると考えられる。一方、「非」の場合は、直後の短単位が「非」と結合する前に後続の短単位と結合して二次以上の結合形を作り、それが「非」と結合するものが多い。このことから、「非」の直後の短単位は、必ずしも「非」の結合対象とはいえない。

参考文献

小椋秀樹・小磯花絵・冨士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕（二〇一一）『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第四版（上）』、国立国語研究所内部報告書
https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/doc/report/JC-D-10-05-01.pdf

国立国語研究所（一九六二）『国立国語研究所報告二一　現代雑誌九十種の用語用字 第1分冊』、秀英出版

国立国語研究所（一九七〇）『国立国語研究所報告三七　電子計算機による新聞の語彙調査』、秀英出版

国立国語研究所コーパス開発センター（近藤明日子）編（二〇一六）『近代文語 UniDic 短単位規程集 Ver.1.1』
https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/doc/unidic-MLJ_rulebook_v1_1.pdf

近藤泰弘（二〇一五）「『日本語歴史コーパス』と日本語史研究」、近藤泰弘・田中牧郎・小木曽稔信編『コーパスと日本語史研究』、ひつじ書房、一～一六頁

野村雅昭（一九七三）「否定の接頭語「無・不・未・非」の用法」、『国立国語研究所論集四　ことばの研究』四、三一～五〇頁

野村雅昭（一九八一）「近代日本語と字音接辞の造語力」、『文学』四九（一〇）、二二～三四頁

間淵洋子・近藤明日子・服部紀子・南雲千香子（二〇一九）「『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅰ雑誌』（短単位データ一・二）テキストの凡例と「中納言」表示項目について」
https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/doc/abstract-zasshi-201903.pdf

山崎誠・前川喜久雄（二〇一四）「第一章 コーパスの設計」、前川喜久雄監、山崎誠編『講座日本語コーパス二 書き言葉コーパス ― 設計と構築 ―』、ひつじ書房、一～二一頁

調査資料

国立国語研究所編（二〇一八）『日本語歴史コーパス　明治・大正編Ⅰ雑誌』（短単位データ二〇一八・〇九、「中納言」二・四・二）
https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#zasshi
（二〇一九年一月二日確認）

謝辞

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」（プロジェクトリーダー：小木曽稔信）及び JSPS 科研費 19H00531 による助成を受けたものです。

（立命館大學文學部教授）